



福島藝術計画

FUKUSHIMA GEIJUTSU KEIKAKU

～ アートで広げる子どもの未来プロジェクト ～



福島藝術計画 × ART SUPPORT TOHOKU-TOKYO 2017
FUKUSHIMA GEIJUTSU KEIKAKU



【福島芸術計画 × Art Support Tohoku-Tokyo2017 とは】

福島芸術計画 × Art Support Tohoku-Tokyo は、福島県（文化振興課）、東京都、アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）の三者が共催し、地域の団体と協働してアートプログラムを実施する事業です。文化芸術に触れる機会や地域コミュニティの交流の場をつくり、文化芸術による地域活力の創出と心のケアという視点から復旧・復興を支援します。

【事業概要】

福島の未来を担う子どもたちの豊かな人間性と多様な個性を育むことを目的とし、県内の保育園、小中高等学校等にアーティストを派遣して、多彩なアートプログラムを体験できるワークショップを実施します。

本プログラムは、ワークショップの内容、方法について、受け入れ側担当者とアーティスト、コーディネーターが綿密に打ち合わせをしながら内容を検討し実施します。ワークショップで制作した作品は、県立美術館等の文化施設2箇所程度に一定期間展示します。

福島県立美術館

2017 学校連携共同ワークショップ

『おとなりアーティスト!』

- **デコって、張りこる～!!**
～不思議で楽しい張り子づくり～
- **紙で絵地図を作ろう!**
- **2017 年学校連携共同ワークショップ**
参加校作品展

福島県立博物館

小池アミイゴの誰でも絵が描けるワークショップ

『わたしのすきな柳津』

- **第1回 只見線体験 + 柳津探検**
- **第2回 描いてみようワークショップ**
- **第3回 描いてみようワークショップ**
- **第4回 ワークショップ 柳津っかがすきなものを思いっきり描く**
- **第5回 ワークショップ 柳津っかがすきな柳津に雪を降らせる絵のセッション**
- **わたしのすきな柳津 成果展**
- **コメント**
小池アミイゴ、幣島正彦、白井英祐、江畑芳

2017 学校連携共同ワークショップ

おとなりアーティスト！



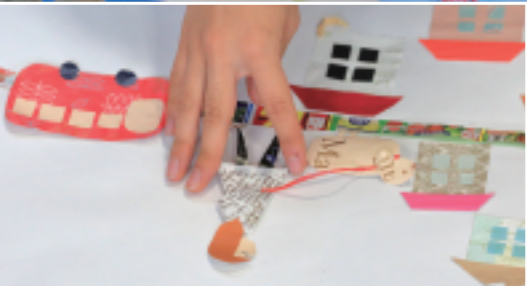
募集チラシデザイン：佐藤洋美

学校連携共同ワークショップとは、美術作家を先生として招き、各学校で子どもたちを対象としたワークショップを開催するアートプログラムです。作家が学校に出向いて子どもたちと交流しながら、いっしょに創作活動を楽しみます。ワークショップは、学校の授業のような1～2時間ごとの活動ではなく、半日～1日全部の時間を使って、学級や学年、部活動または全校一斉で行います。そして作家のユニークなワークショッププログラムにより、いつもとは違う「創り出すことの喜び」を体験することができる活動になっています。

今年度のワークショップは、昨年に引き続き『おとなりアーティスト！』と題し、福島県出身のアーティスト2名（橋本彰一氏 / 工芸家・デコ屋敷本家大黒屋21代当主、佐藤洋美氏 / デザイナー・コラージュ作家）を招いて、県内12カ所の幼稚園から高校でワークショップを開催しました。

『おとなりアーティスト！』には「文化を発信する人」が近隣地域に住んでいることを子どもたちや学校の先生に知ってもらうことや、子どもたちに美術作家との交流を通じて、アートが遠い世界のものではないということを体験的に感じて欲しいというねらいがあります。

主催：福島県（文化振興課）、東京都、
アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）、
福島県立美術館、特定非営利活動法人 Wunder ground



紙で絵地図を作ろう！

紙の組み合わせで作った家や道路は、一枚の大きな絵地図になった。使う素材は、子どもたちの住む地域にある店舗の包装紙やチラシ、新聞紙など。ワークショップのために参加校の先生や子どもたちが集めてくれた。洋美さんは、集められた紙を色調ごとに分けながら、色や形、模様を組み合わせで新しい様々なイメージが生み出せることを子どもたちに示した（コラージュの手法）。事前に調べた街（建物）の様子をイメージしながら、手でちぎったり、ハサミで切ったり。完成した絵地図は、子どもたちが初めて気付いた街（建物）と紙の魅力を繋ぎ合わせる作品となった。



作家：佐藤洋美（デザイナー／コラージュ作家）
1985年 伊達市出身。多摩美術大学 造形表現学部を卒業後、GRAPH 入社。北川一成に師事。「捨てられない印刷物」づくりに携わる一方で「捨てられた印刷物」を収集し、コラージュ制作も続ける。現在キャッサバコラージュデザイン代表。コラージュや印刷を駆使した、手触りのあるデザインを提案。いわきうふふ便（いわき）、ナラノハ（檜葉）、はじまりの美術館「絶望でもなく、希望でもなく」（猪苗代）等、県内でのデザイン多数。2014年 時計ブランド「Time Lag」を開始。

みなさんの暮らす町には、何がありますか？ 山や海が見える？ かわいい草花が咲いている？ どんなお店がある？ お家の屋根は何色だろう？ 近所のお店でもらう包装紙や、家にある紙を集めて、紙を切ったり、貼ったり、やぶいたり、紙の持つ表情を楽しみながら自分たちの町の地図をつくりましょう！ 見慣れた毎日の風景も、いつもより少し注目して観察してみると新しい発見があるかもしれません。自分たちの町のワクワクする風景が目前に広がって、昨日よりもっと毎日が楽しくなりますように。

アンケート (抜粋)

教師が思っていた以上に幼児は細かい部分を見ていて作ろうとしていたのが驚きだった。(幼稚園教員)

子ども達がとてもものびのびと楽しそうに活動していたのが印象的です。(中学校教員)

慣れてくると自分なりのアイデアを出して工夫して取り組んでいました。2時間弱という少し長い時間でしたが、子ども達は集中して取り組んでいて、子ども達の違った面を見ることができました。(幼稚園教員)

大きな大きな作品となり「楽しかった」という感想がたくさんかれました。自由な発想の作品もあり、子どもの可能性を感じました。(幼稚園教員)

包装紙を破って地図が作れると思っていなかったのでびっくりしました。(園児)

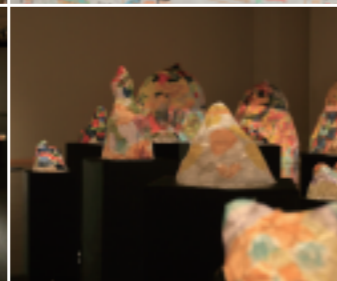
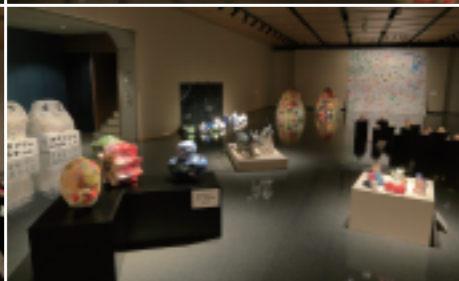
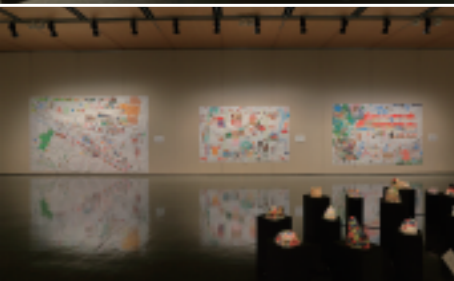
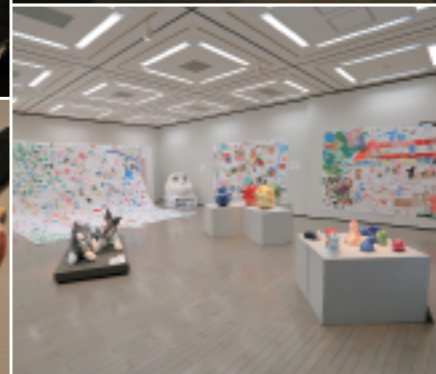
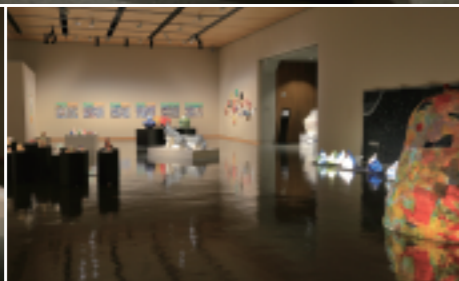
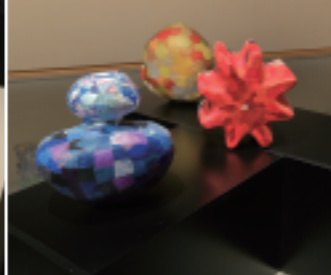
いろんな紙を組み合わせると、お店や学校をつくっていくのが楽しかった。(園児)

大きな紙を使って好きなように、切ったりはったりするのが楽しかった。最後に大きな地図になってすごかった。(園児)

最初は、どんなふうにしたらいいかわからないけど、友達と協力して作っていきながら、みんなで作っていきながら楽しかった。(園児)

- 10月 5日(木) 学校法人西郷幼稚園 (全園児 / 136名)
- 10月 25日(水) 福島市立杉妻幼稚園 (全園児 / 45名)
- 10月 26日(木) 学校法人開南幼稚園 (年長 / 38名)
- 11月 8日(水) 会津美里町立高田中学校 (2年 / 86名)

- 「幼稚園バスが通る、みんなの町の絵地図をつくろう」
- 「みんなのすまの町の絵地図をつくろう！」
- 「幼稚園の園舎と園庭をコラージュで表現」
- 「高田の町の絵地図を制作」



2017 学校連携共同ワークショップ 参加校作品展

アンケート（抜粋）

本日の感想・ご意見をお聞かせ下さい。

子ども達の力作を見られてよかった。

子ども達の創造力豊かな作品を見て感動した。

養護学校の生徒さんの作品に感動しました。

楽しく見えました。おそらく作っている人達は、もっともっと楽しめたのだと思います。

どれも素晴らしい作品だが、県立美術館の中だけに留めておくのは惜しい。子ども達の地元の公共施設に常時でなくとも展示して、芸術教育の意義をもっと広く県民に知ってもらわなければならないように思う。そもそもこの取り組み自体があまり知られていないように思う。

学校連携共同ワークショップという事業についてご意見をお聞かせ下さい。

子ども達が学校でなかなか体験出来ない場を提供するものであり、広げて欲しい。

大変良い企画だと思います。

初めて知り、楽しそうと思いました。

言葉で自分を表現できない子どもでも、自分の感情や考えを素直に表現できるのがアートの強みであり、新たな表現方法を知ること、さらに豊かな自己表現が可能になるという点でこのワークショップは、意義があると思う。仲間と協力して一つのものを作り上げる達成感を得ることもできる。

福島展（写真左ページ）

会期：2017年12月16日（土）～12月24日（日）

2018年1月6日（土）～1月14日（日）

会場：福島県立美術館（企画展示室B）

開館時間：9:30～17:00

いわき展（写真右ページ）

会期：2018年2月7日（水）～2月12日（月・祝）

会場：いわき市暮らしの伝承郷（企画展示室）

開館時間：9:00～17:00



イラスト：小池アミイゴ

小池アミイゴの誰でも絵が描けるワークショップ わたしのすきな柳津

「今日も楽しく絵を描こうね～」とボク。

「ええ～、かきたくなーい」と女の子たち。

「あ、そう」「じゃあ描かなくていいや！」

「え、」
女の子たちしばしフリーズ。そして「じゃあ、かかなーい！」

「うん、今日は絵を描かなかったってことを持って帰れたらいいね！」

柳津の子どもたちと5回に渡り重ねたワークショップセッションの4回目、前回までは学童保育に通う30数名が一同に参加していたのに対して、『ほんとに絵が描きたい人』だけ集まってもらったはずの現場での会話です。

イラストレーターの小池アミイゴさんと
柳津町の小学生たちが
「わたしのすきな柳津」を探しました。

只見線に乗って
町を歩いて
大きな紙や紙皿に描いて探した
「わたしのすきな柳津」。

第1回 只見線体験+柳津探検

11月11日(土) 12:00~15:00
集合・解散場所：斎藤清美術館 アートテラス
参加者数：11名

ワークショップの1回目は、いつもどきどきします。
アミイゴさんからはじめましての挨拶は
絵本『とうだい』の朗読。
東日本大震災後にいわき市を訪れたアミイゴさんが
海への想いをこめて描いたイラストです。

少し距離が縮まったかな？
一緒にバスに乗ってお隣り、三島町の会津宮下駅へ。
柳津町も走る只見線の駅です。
電車を待つ間、アミイゴさんと柳津っこはホームを探検。
やがて白い車体が現れました。
見慣れたる車両も、走ってる姿を見るとわくわくしますね。

只見線に乗り込み柳津駅を目指します。
車窓に秋の会津の美しい景色が次々に広がりました。
只見川にかかる橋の上では歓声も。
「あ！あれ、私たちの学校」
柳津駅に近づくとみんなが通う小学校が見えてきました。
只見線から見える柳津町のことを次々にアミイゴさんに教えてくれます。

柳津駅に到着ー！
ここから歩いて斎藤清美術館を目指します。
途中、柳津っこがあらかじめ相談していた
アミイゴさんに見てもらいたい柳津ポイントをめぐりました。
柳津と言えば！の栗饅頭屋さん。
虚空蔵様円蔵寺。
只見川にかかる赤い橋。
道に積もるいろとりどりの落ち葉も美しい探検ルートでした。

斎藤清美術館に戻って第1回ワークショップはおしまい。
すきな柳津が
なんとなく想い描けたワークショップでした。



11月11日 セッション1 「なにも知らない」

柳津の子どもたちと一緒に絵を描くお話をいただき思ったことは、ボクは柳津のこともここで生きてきた子どもたちのことも「なにも知らない」ということでした。
だったら東京で暮らすボクがなにか与えちゃう前に、子どもたちから柳津のことを教えてもらおうのが良いだろうって、主催者からの『柳津を通る只見線をフィーチャーしてくれ』とのオーダーに乗っかり、斎藤清美術館から子どもたちとバスで近隣の駅まで移動し、只見線に乗って柳津に戻り、子どもたちが考えた『アミイゴさんに見てもらいたい自慢の柳津コース』を歩いて美術館に帰る。そんなフィールドワークを企画しました。

オトナの思惑は、こうすることで『子どもらしい楽しく綺麗な柳津や只見線の絵が生まれる』ということでしょう。しかし、山間の町で育ったと言っても、浴びる情報は都会と変わらない時代を生きる、シャイだけどタフな子どもたちです。野生の元気さと情報の波をかき分けるしたたかさでもって、奥会津の地を駆ける、駆ける！
行動を共にしたボクが感じたのは「こいつら、手強いぞー！」であり、柳津の美しい風景も只見線の楽しさも霞むくらい「こいつら面白い！」でした。
フィールドワークを終え、解散の挨拶の際のボクの挨拶。
「今日は色々な場所を案内してくれてありがとうー！」
「でも、柳津が一番素晴らしいと思ったのは、キミたちだよー！」

そうしたら「ああ、そう言うと思ったよ！」だって。

うん、柳津の子どもたち、手強いぞ！

小池アミイゴ



第2回 描いてみようワークショップ

11月13日(月) 14:00～16:00

会場：斎藤清美術館 アートテラス

参加者数：36名

第2回ワークショップからは、
斎藤清美術館のアートテラスが会場。

長一い、真っ白な紙をアミゴさんが
用意してくれました。
思う存分、描ける大きな紙に
柳津っこ盛り上がります。

第1回でアミゴさんを案内した
見てほしいポイントを描く子。
好きなものを描く子。

赤い橋。
赤べこ。
電車。
怪獣？

ペンで描いた後、
アミゴさんが自慢気にとりだしたのは、
きれいなたくさんさんの絵の具。
プロ仕様の発色の良い絵の具たちに
柳津っこ、さらに盛り上がります。

色とりどりに色を重ねた大作が生まれました。



11月13日セッション2「それを続けな！」

柳津小学校の児童が利用する学童保育「ジャンプ」の1年生から4年生、総勢37名
と初めて一緒に絵を描くセッション。

「今日はみんなと大きな絵を描こうと思うよ～」とボク。

「えー、やだー」「かきたくな～い！」と、やはり手強い。

学校が一緒で、放課後も一緒に、みんなとても個性的なくせして、ひとりひとりがキャラを設定し演じ、コミュニティの中での「本当の自分」をやり過ごしている。柳津であれば「反抗キャラ」がひとつブームなんだろう。そんな子どもたちの姿勢を見てオトナは「甘えている」って叱ったりするのだけど、こういう安易なキャラ設定はオトナも子どもも関係なく、日本のあらゆる現場で見られることなんだよな。

さて、どうやってキャラの薄皮破って、ひとりひとりの輝く個性を引っ張りだそうか。
この日どんな手順を踏んでみんなで大きな絵を描いたのかは割愛。

以下ある現象をひとつ。

とても繊細な絵を描いていた男の子の領域に、とても大胆な表現をしていた男の子の筆がガバッと侵入。

ワッと泣き出す繊細くん。さっとふたりの間に入り込み「ダメでしょう！」と大胆くんを叱る学童のスタッフさん。

そんな子どもとオトナの領域を身体で遮りボクは大胆くんに「今のそれ、かっこいいと思ったぜ」「描いて気持ちよかった？」と聞く。「うん」と大胆くん。「よーっし、それを続けな！」そう語った直後、繊細くんに「せっかく描いたのが、残念だったね」「でも事故だったんだって」そんなこと言っても繊細くんは納得出来るはずない。

うん、わかる。「でも、キミがここでずっとステキな絵を描いていたの見てたからねっ！」「あっちにたくさん白い場所あるから、もっとスゴイの描こうよ！」「今度は俺が守ってやるからさ」そんな会話。

そんな会話を37人分、ひとりひとりの個性を見極め重ね続けた時間。

子どもたちの表現の現場でオトナのボクがやることは、ひとりひとりと会話し続けること。そして、子どものやることが振り切れた表現なのか暴力なのかを見極めること。この線引きはとても難しいことなんだけど、決して諦めてはならず、暴力(「悪ふざけ」とも呼ばれる)に出会ったら、それよりもっと魅力的な表現があることを、子どもと視線の高さを同じくして語り、確認し、子どもが自らそちらに向かうようにしてゆきました。

結果、こんなワークショップを日本の各地で開催してきた中でも、屈指の美しさが花開いた時間になりました。

小池アミゴ



第3回 描いてみようワークショップ

11月15日(水) 14:00 ~ 16:00

会場: 斎藤清美術館 アートテラス

参加者数: 35名

今回は、小さい(?)A3サイズの紙が登場。
「ちょうだい!ちょうだい!」と
集まる柳津っこ。
アミイゴさんから質問が飛びます。
「好きな色は?」
「柳津の好きな所は?」
今日はことばで教えてね。
あか、ブラック、緑、黄色、青。
こくぞうさま、ただみがわ。

「じゃあ、紙を誰かと交換しよう」

もらった紙に書かれた言葉を
裏に描いてみました。

同時にアミイゴさんは
ちょいちょいと低学年の子を手招き。
さささと似顔絵を紙皿に描きます。
渡された自分の顔。
嬉しかったり、
こんなんじゃないー!と怒ったり。

アミイゴさんに描いてもらった似顔絵に
自分で色をつけました。

ピンクの髪
オレンジの肌
水色の髪
黄色の肌。

いろんな柳津っこが現れました。



11月15日 セッション3「ヤンキーっぼく描きたいんだよね」

柳津の子どもたちが持っている素晴らしい魅力を、さらに深く、ひとりひとりの個性に近づいて見てみようとした時間。

しかし、初っ端から失敗の予感です。

只見線フィールドワークとみんなで大きな絵を描くワークショップ、その2回のセッションで、ボクも柳津っこコミュニティに取り込まれ、「もじゃもじゃおじさん」みたいなキャラが与えられ、彼らの日常の仲間にされていました。

そうすると、個性が生きた絵を描くというクリエイティブな行為より、遊びの方が優先されてしまう。

「美しい柳津を描こう!」みたいな大人の思惑はベシャンコに潰されてしまうのです。そこで「みんな、ホントに自分が描きたいもの描きなよ!」「描きたくないもの描いたらダメだぜー!」と発想を思いっきり切り替えました。

ボクは、ボクのワークショップで子どもたちがアニメやゲームのキャラを描くことを止めません。

そのことが子ども教育の「アート」や「芸術」のイメージと違うのか、驚かれ「なぜ?」と聞かれることが多いです。

オトナは子どもに「自由に描きなさい」とうながし、「子どもらしい絵だね」と褒めます。

では自由ってなんだろう?子どもらしい絵って?

実はオトナがそれらをちゃんと分かっておらず、子どもに「自由」や「子どもらしさ」を押し付けて安心しちゃっていないのかな?なんて思うのです。

柳津の子どもたちは、豊かな自然の中で暮らし、日常的にドラえもんやスマホゲームに触れている子どもたちです。

彼らがなにを描くのか?教育とは別の視線をもって愚直に待ち続ける。そんなことが面白いし、新鮮なのです。

繰り返し描かれるアニメやゲームのキャラたち。「わたしヤンキーっぼく描きたいんだよね」って眩きながらケミカルな色を塗り重ねる女の子。「顔を描こう」ってボクの呼びかけに電車の車輪を描く女子チーム。只見線には目もくれず特急列車を描く男の子。そんなこんなが柳津の自然から得られた豊かな色彩と相俟って、最後は「柳津ならではの得体の知れぬなにか美しいもの」に昇華しました。

そんなひとりひとりの表現と悪ふざけがせめぎ合った空間の隅っこで、描けなかった子がいたことを記憶しておきました。

小池アミイゴ



第4回 ワークショップ 柳津っこが好きなものを思いっきり描く

1月20日(土) 14:00~16:00

会場: 斎藤清美術館 アートテラス

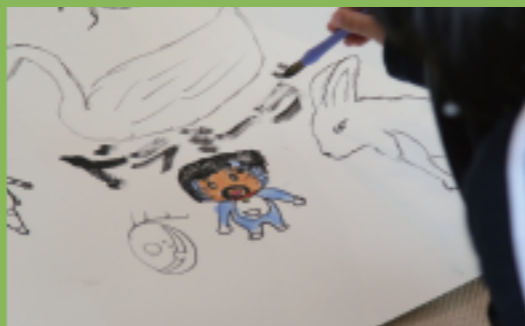
参加者数: 9名+保護者

新しい年を迎えて、
会津の大事な年中行事・小正月も終わって。
第4回ワークショップは、
そんな空気の中で行われました。
保護者にも参加いただきたくて、
第4回と第5回は土日に開催。

おなじみになってきた、
斎藤清美術館のアートテラスに集合。

そして大好評の長一白一紙が登場です。
アミゴさんが保護者の方をお願いします。
「寝そべってみてください」
紙の上に横になったお母さんの輪郭を
柳津っこがペンでたどります。

輪郭はやがて…
柳津っこの手によって巨大パンダに！
あちこちで、
それぞれの好きなもの・ことが
描かれていきます。
メロンパン。
航空母艦。
花畑。
ドラミーゴさん。
大作が次々に生まれました。



1月20日 セッション4 「アミゴさん、キモ〜い！！」

前回のセッションから時を置いて開催した今回は、7~8名ほどの「絵を描きたい」と願う子どもたちが参加。

今回こそじっくりひとりひとりの個性を見極め、コミュニケートして描けるだろうと思っていたら、「ええ〜、かきたくないーい」って。

でも、学校の授業じゃないからね、絵を描こうと来てみたけど、やっぱり描きたくないってのはありだし、そうした彼女たちのいわゆる「反抗」が、彼女たちなりの親しみを込めたコミュニケーション手段だって分かって、今回は馬鹿正直に子どもたちの言葉に答えていってみよう。

なぜそう思えたかって言うと、前回絵を描く輪に入りきれなかった女の子が参加してくれていたからです。

この日は、大きな紙にみんなで一斉に絵を描き始め、しかし、大きな紙にひとりひとりの世界観が見えたら、ひとりひとりの大きさに紙を分けてみました。

この日もオトナの喜ぶテーマとして「柳津の美しさを描く」なんてのがあったけど、海上自衛隊の装備を延々と描き続ける男の子とか、みんなそれぞれ描きたいものを描き倒していました。

そんな中、前回描けなかった子ちゃんが、とっても美しい色彩を駆使して自分の世界を構築してゆくの、ウツリ見惚れてしまいました。

前回彼女が描けなかったのは、色んな理由が重なってだと思うけど、一番は想像力が豊かだからじゃないだろうかと。自分が形にしようとする世界をしっかりと想像してから行動に移す子ども。他の子どもたちが瞬発力をもってやっているのを見て、その中でどうすれば最善の自分を出せるか考え続ける力のある子ども。でもそうすることはとても疲れることだし、これが学校だったら時間で区切られた中で無理やりアウトプットしなければならない。

ボクがやれることは、子どもが自分からやろうとするのを「待つ」ということでもあります。なので、「かきたくないーい」って子どもは描かなくてもいい。特にこの日はそんな判断が強く出ました。

前回描けなかった子ちゃんの唯我独尊の姿に意地悪な気持ちも湧いてきたのか、「かきたくないーい」って女の子が茶々を入れてきました。これくらいのことでは小さなコミュニティに有りがちなことですが、この時だけはちょっと厳しく「今やっていることはカッコよくないなあ」と、前回描けなかった子ちゃんの現場を守ってみました。そんなことのちょっと後で、「かきたくないーい」子ちゃんたちが「見て見て！」って、パレットにドバドバ絞出した絵の具を持ってきて、それがもう、ものすごく勢いのある美しさでね〜！
「なんだよ、キミたちすごい描いてるじゃん！」「でか、絵を描いてるじゃん！！」って褒めたら、ちょっとなにか考える顔して、次の瞬間ニヤッと笑って「アミゴさん、キモ〜い！！」って叫んで逃げてゆきました。
ふう。

小池アミゴ

第5回 ワークショップ 柳津っかがすきな柳津に雪を降らせる絵のセッション

1月21日(日) 14:00～16:00

会場：斎藤清美術館 アートテラス

参加者数：6名+保護者

今日もアミイゴさんが保護者の方をお願いします。
「柳津の山の形になってみてください」
紙の上に寝転んで山の形になった
お母さんの輪郭を
柳津っかがペンでなぞりました。

そこに、思い思いに描く
山にあるもの、いるもの。
お家、動物、花、虫。

後半の絵の具の時間になると
あらたな道具が開発されました。
ロール紙の芯に絵筆をとりつけた
デッキブラシ型絵筆誕生。
たっぷりと絵の具をつけて
ダイナミックに描いていきます。

塗り重ねた深い緑は
柳津の山？

アミイゴさんからの提案で、
デッキブラシ型絵筆に
白の絵の具を乗せて、
一人1点ずつ色を置いていきました。

柳津の山に降る雪のような。



1月21日 セッション5「自由は与えられない」

最終回の始まりもこれまでと変わらず、「かきたくなーい」という子どもたちの
キャラを見せつけられるところからスタートです。

でも嬉しかったのは、これまで「それやっちゃダメ」という立場でいたスタッフ
の方々が、子どもたちのやることにまずは「いいね」「きれいね」とアプローチ
してくれている姿に出会えたこと。

震災直後、海を真っ黒に描く子どもがいました。引きつったギザギザの線ばかり
描く子どもがいました。

それもこれも子どもの表現。それを否定するのではなく、「黒い海だね」「ギザギ
ザの線だね」と受け止めるちょっとした余裕をオトナが持てたら、子どもは気持ち
が楽になるんだと思います。

震災から1年目の春に気仙沼で一緒に描いた女の子たちは、終始美しい色で「自
分の好きなもの」を描いていった先で、怒ったような表情して真っ黒な絵の具で
「復興するぞ！」と殴り書きしました。

ボクはビックリしちゃって「それ本当に描きたかった?」「今日は自分の好きな
絵を描けばいいよ」そう語りかけたら、安心したように小さくニコッと。

そういえばこの子たち、今日は1回も笑っていなかったなって気づいた瞬間です。
「復興するぞ」は復興に向かって頑張っているオトナたちに向けた表現、オトナに
対する付度であって、本当に自分たちが描きたいものとは違っていたんだなって。

こういったことは、熊本の震災の後でも経験したことで、子どもたちは本来親に
良く見てもらいたいものなのですが、それ以上に実によく親を見ていて、絵を描く
なんてことも、まずは親との会話の代わりであるんだと気づくのです。

子どもの表現が、本当に好きなものを描いているのか、オトナの顔をうかがった
ものなのか、もしくは他に並々ならぬ必然のあるものなのか、オトナは日々
ちょっとした心の余裕をもって判断できたらいいなと思っています。

オトナが絵を通して子どもたちと会話する術を得た柳津セッション最終日。
だからってみんな言うこときやしない。だったら最後に俺様の力を見せつけて
やるかと、大きな画面に子どもを圧倒する迫力をもって絵の具を塗り始めたボク
です。

そんな姿を目で追っていた1人の女の子が、紙が巻いてあったボール紙の長い筒
の先に刷毛を付けたいと言ってきました。

「いい考えだね～！」って、ボクは1メートル20センチの長い筆を作る手伝い
をしました。

彼女たちが自分たちの手で表現するための武器を見つけた瞬間です。

小池アミイゴ

わたしのすきな柳津 成果展

2月23日（金）～3月21日（水・祝）休館日：毎月曜日
観覧時間：9：00～17：00（入館は16：30）
会場：斎藤清美術館 アートテラス 料金：入場無料

5回のワークショップで生まれた作品を、アミイゴさんとスタッフで展示しました。

みんなが描いた「わたしのすきな柳津」が伝わるように。みんなのことを思いながら展示をしました。

第5回に描いた柳津の山はババーンと入口正面に。

第4回でうまれた巨大パンダは柱に。

第3回でアミイゴさんと柳津っこが合作したカラフル似顔絵絵皿は空中に。

第2回の色とりどりの大作、窓の外からも見えるかな？

会期中に、柳津っこたちが展示を見にきてくれました。楽しそうに見てくれて良かった。みんなのすきな柳津、教えてくれてありがとう。



アートや芸術というより、雑菌のようなもの

5回のセッションのほとんどは混沌の中であって、しかしだからこそ、彼女たちが手にした武器の先から生まれたものは、あらゆる色彩を呑み込み、もはや「何色」と語ることの出来ぬ、あえて言えば「柳津のわたしたち色」という深い美しさを生み出したのです。

「なにも知らない」ところから始めた柳津セッションを通して、オトナは「自由」というものを子どもに与えることは出来ない、しかし「自由」というものを子どもが自分の手で獲得してゆく、そんな現場を作るのはオトナの仕事なんだという考えに至りました。

ボクはこんなワークショップを15年くらいやってきましたが、最近、特に震災以降、オトナが言いたいことを言いがたい世の中になってしまい、その影響が子どもたちに出ているように感じています。以前だったら大きな画面に突っ込むようにして筆を走らせていた子どもたち。しかし、今は親の顔を確認してからじゃないと最初の一步が踏み出せないでいる。そんな姿によく出会うようになったのです。

震災以降の世界でボクは、今までの価値観を一旦忘れて、人が生きるのに本当に必要なものを考え続けてきました。しかし、未だに未来がどうなるかなんて語る事が出来ないうです。

未来に対してとても無責任な存在のままのボクということです。

そんなボクがやらなければならないことは、子どもたちが未来でなにか困難に向き合わねばならなくなったとして、自分で考え行動し困難を乗り越える力を持てるようなマインドを育てること。

こういうことを「教育」で語るつもりは無く、また「アート」や「芸術」という言葉で語れることのなかのどうか、そんな判断は他の方に譲るとして、これからも必要を感じたら、今や絶滅危惧種の「街のあぶないおじさん」として、子どもたちの心の免疫力高める存在でいられたらいいなと思っています。



作家：小池アミイゴ

群馬県生まれ。会津若松市出身の長澤節主催のセッションで絵と生き方を学ぶ。フリーのイラストレーターとして1988年から活動スタート。書籍や雑誌、広告等の仕事に加え、クラムボンのアートワークなど音楽家との仕事多数。2000年以降は大阪や福岡や沖縄を始め日本各地を巡り、地方発信のムーブメントをサポート。より小さな場所で唄を手渡すようなLIVEイベントや絵のワークショップを重ねる。

美術館の役割

					
齋藤清美術館	幣島正彦（へいじままさひこ）				

齋藤清美術館は画家の齋藤清個人名の美術館ですので、齋藤清作品の展示やイベントの企画をしてきました。しかし、ここ数年、町立の美術館の役割などを考慮して、もっと地域に開かれた美術館にしていく方向で運営することになり、柳津町中央公民館とは今回のワークショップが開催される以前から緩やかではありますが、公民館と美術館とで一緒に何かできないかということで、様々な取り組みを進めてきました。そのように模索していく中で今回のワークショップのお話をいただき、開催することに至りました。

柳津町中央公民館にて開催されたワークショップの様子

実際にイベントの開催を通して、気づかされることが多くあり、いまままで美術館で開催してきたワークショップや体験教室などでは、講師、アーティストと参加者といったかたちで教える／教えられるの立場が明確に分かれているものが多くありましたが、アミイゴさんのワークショップにおいてはそういった立場を一度壊して、フラットな状態で一緒につくることを促す流れになっていて、とても新鮮な雰囲気でのイベントになりました。

一緒に参加した公民館、美術館のスタッフのみなさんは、最初は戸惑いがあったようですが、徐々に対応していき参加した子どもと一緒にって絵を描いている方も見受けられ、少しずつ大人の方の意識が変わっていくのを感じることができました。

柳津町中央公民館にて開催されたワークショップの様子

アミイゴさんのワークショップに関して、参加した子どもやスタッフの方からは好意的な意見が多く、今回のイベント開催を機に、地元の方のアートや美術に対する意識がほぐれていってくればと思います。また、今回のようなイベントを通して、町立の美術館としての役割を考えていければと思います。

絵は個性、みんな違って、みんないい！

					
柳津町中央公民館	白井英祐（しらいえいすけ）				

放課後子ども教室の小学生を対象として、福島子ども藝術計画の一環として行った「わたしの好きな柳津」に、公民館の立場として関わらせていただきました白井英祐と申します。普段、私は町の公民館で臨時職員として、放課後子ども教室の実務を担当しています。その中で、今回、小池アミイゴさんと一緒に絵を描くことを通して、様々な事を学ばせていただきました。以下、2つあります。

1つ目は、絵を描くことを通して、子どもの笑顔を感じ取れたことです。普段、絵に興味がない子ども、絵を描く中で素敵な笑顔を見せてくれました。この経験は彼らの貴重な財産になったと思います。これからの人生の中で、辛いことがあった時、この経験を思い出し、乗り越えていてもらえたら幸いです。

2つ目は、絵に対してスタッフの意識が変わったことです。大人の「それやっちゃだめ」とか「これはこう描いたほうがいい」とった言葉が、子どもの感性を奪っていることを、小池アミイゴさんから学べました。子どもたちは大人の余計な命令なんか気にせず、のびのびと絵を描く方が、彼らの表現の幅を広め、創造性豊かな人間になってくれると思います。今回のワークショップを通して、スタッフの声掛けに変化が起きました。絵を上手に描くことでなく、「楽しく描けた」ことを重点的に褒めるようになったのです。自分が小学生の頃は絵が下手くそと言われていたので、見返すために本気で絵を描こうと頑張ったのですが、当時、そんな優しい言葉がけをしてもらいたかったなと感じています。

柳津町中央公民館にて開催されたワークショップの様子

これから柳津町はどんどん過疎化が進み、高齢化率も 50%を超えて大変な状況が予測されます。その中で、住民のつながりはますます重要になってくるでしょう。その中で、公民館としてもこのような事業に積極的に参加し、齋藤清美術館と協力して、絵を通した交流を行い、町を盛り上げていきたいと思っています。

絵を描くワークショップの成果

					
コーディネーター	江畑 芳（えばたかおり）				

子どもたちが、「うまく描けないから描かない」と言ったり、描いたものを「間違えた」と言って消したりしていた。ワークショップの間、自分が自由に絵を描くために勉強してきたのに、デッサンが上手になればなるほど不自由になっていくような気がしたことを思い出していた。うまく描けたってそれは自由ではないかもしれないよ、と喉まで出かかってやめた。いつも子どもと一緒にするワークショップでは、自分の経験を思い出してやきもきしてしまう。

柳津町中央公民館にて開催されたワークショップの様子

複雑な気持ちもありつつも、よい発見もあった。最後のワークショップで、まだ小学校にもいかないくらいの男の子を隣で見ていると、ペンで描いていたところに色を塗ろうとしはじめた。でもキャップをうまく開けられなかったので、代わりに開けた。塗りが終わると、次はこの色を塗りたいと教えてくれたので、またキャップを開けた。彼が満足するまでキャップを開ける係をした。彼が頭の中でどこを何色で塗るかを高速で考えているのがわかるようだった。そうそう、そういうときの頭が回転しながらも、心は静かである心地よさ。彼のおかげで、子どもには子どもなりの虚栄心だとか、夢中になる時間だとか、いろいろあっていいのだと思えた。彼が夢中になる心地よさを持ったまま大人になれますように。

柳津町中央公民館にて開催されたワークショップの様子

ワークショップが終わって、この文章を用意しながら、記録集用の写真を選んでみると、キャップを開ける係をさせてくれた子の真剣な表情や、心から楽しそうにしている表情がたくさんあった。これのためにアミイゴさんは子どもたちの様子に合わせて絶えず声をかけて回っていたのかもしれない。夢中になるということは、思っているより難しい。「夢中になりなさい」と言われてなれるだろうか。わかりやすい結果ではないかもしれないけれど、夢中な時間を少しでも持てた子どもたちがいたというのは、よいワークショップだったと言える気がした。

主催：福島県（文化振興課）
東京都、アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）
福島県立博物館、特定非営利活動法人 Wunder ground
共催：齋藤清美術館
協力：柳津町中央公民館

柳津町中央公民館にて開催されたワークショップの様子

講師：小池アミイゴ
企画・運営：福島県立博物館（小林めぐみ、川延安直、塚本麻衣子）齋藤清美術館（幣島正彦、今永美貴、伊藤たまき、田崎治）柳津町中央公民館（白井英祐、若佐恵美子、齋藤明代、齋藤明美、佐藤正喜、鈴木恭子、永島タキ子、新井田恵子、平山睦子）江畑芳

チラシデザイン：小林めぐみ（第1～第3回ワークショップ）江畑芳（第4～第5回ワークショップ、成果展）

撮影：佐藤聖太（p14-17）、須田健志（p18-22）、江畑芳（p12-13）、白井英祐（p22）

記録集コメント：小池アミイゴ、幣島正彦、白井英祐、江畑芳
記録集テキスト：小林めぐみ、小池アミイゴ
記録集編集：小林めぐみ、江畑芳

発行年月日： 2018年3月

発行： 福島県（文化振興課） 東京都 アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団） 特定非営利活動法人 Wunder ground

制作・編集： 福島県立美術館（國島敏） 福島県立博物館 江畑芳 特定非営利活動法人 Wunder ground

写真： 國島敏、佐藤聖太、須田健志、江畑芳、白井英祐

デザイン： ユアサミズキ（mizDesignStudio）

事業名： 福島県 アートによる新生ふくしま推進事業 委託業務 / 東京都による芸術文化を活用した被災地支援事業（福島）

冊子及び事業への問合せ先：

特定非営利活動法人 Wunder ground（Art Support Tohoku-Tokyo 事務局）

E-mail: tasfukushima@gmail.com **URL:** <http://f-geijyutsukeikaku.info>

主催： 福島県（文化振興課）、東京都、アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）、 特定非営利活動法人 Wunder ground

こども

福島藝術計画

FUKUSHIMA GEIJUTSU KEIKAKU